

説教 『苦しみの謎と祈り』 山本 護 牧師
聖書 ヨナ書 2:1~3/使徒言行録 9:1~9

「[キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた]という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値する。わたしは、その罪人の中で最たる者(1テモテ 1:15)」。パウロは自分を特別視して「最たる罪人」と言ったわけではない。彼は、信仰熱心なあまりに教会を迫害し(フィリ 3:5~6)、その最前線を走った(使徒 9:1~2)。「最たる罪人」とは文学表現ではなく、そのままパウロの行為であった。

それにしてもなぜ、神はこうした教会への迫害を許し給うのか。キリストを証しする者へ弾圧をなぜ放っておかれるのか。分からない。もしかすると、神が認めるその苦しみの奥には、何か秘密があるのかもしれない。誰にでも分かる事としてではなく、苦しむ本人だけが受け止める謎が。

迫害旅行の途上、サウロ(パウロ)は天の光に照らされて倒れ(9:3)、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか(9:4)」という声を聞く。そして「わたしは、あなたが迫害しているイエスである(9:5)」と自己表明をする。パウロの同行者たちもその声を聞いたが姿は見えなかった(9:7)。もとよりサウロとて見えないのだが。とりわけ語りかけられた当人のサウロは、しばらく視力を失っていた(9:8)。

「サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった(9:9)。「三日間」とは象徴的な意味だ。十字架の後、三日目に復活したイエスのことや(ルカ 24:7)、巨魚の腹に三日三晩いたヨナのごとが思い起こされる(ヨナ 2:1)。「ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、言った。苦難の中で、わたしが叫ぶと、主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めると、わたしの声を聞いてくださった(2:2~3)」。すなわち三日間とは「死」の状態なのだ。死の内でヨナは叫びつつ祈った。

三日間、失明し飲み食いできない死の内にあったサウロは、徹底的に迫害するつもりだったダマスコの町(使徒 9:2,8)で何をしていたか。神はアナニアという一人の弟子に告げた。「ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている(9:11)」と。そうか、サウロもヨナのごとく陰府の底から祈っていたのか。一切の事ができない死の状態が、真実の祈りを開いたのか。

信仰の実践に燃えていた青年サウロ(7:58,8:3)は祈ったことがないのか。当然、ある。しかしファリサイ人の中のファリサイ人を自認する彼の祈りは、イエスが示したようだったろう。「ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。[神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者ではなく、また、この徴税人のような者でないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています](ルカ 18:11~12)」。自分自身を省みたい。これほどあからさまではないにせよ、私たちは己の信仰を救いの領域にして、どこか他者を裁いてはいないか。

死の内でサウロの祈りは激変した。「徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。[神様、罪人のわたしを憐れんでください](18:13)」という祈りに変わっただろう。この徴税人の祈りこそ私たちの祈り。死に囚われ、それを超えていく祈り。キリストの信仰は、迫害一等賞のサウロから世界へ広められた。神が許し給う苦難には深い謎がある。また私たちの苦しみにも。



【おまけのひとこと】

三日間の死 時計で測れば千年かもしれぬ その千倍かもしれぬ ただ当事者には 三日間の死よく寝たと甦るか その時はキリストにお任せしよう 日々の小さな死もキリスト任せではあるが